

名古屋芸術大学グループ 通信

65
February
2026

特集

名古屋芸大の“To Be”

伝承と革新、交わる場所のその先へ



名古屋芸術大学グループ

<https://www.nua.ac.jp/>

■名古屋芸術大学／大学院：音楽研究科
美術研究科
デザイン研究科
人間発達学研究科

学部学科：芸術学部 芸術学科
音楽領域 舞台芸術領域
デザイン領域 美術領域 芸術教養領域
教育学部 子ども学科

■名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■満子幼稚園 ■たきこ幼児園 ■たきこ第二幼児園に
■奥知保育園 ■幼保連携型認定こども園 森のくまっ
■名古屋音楽学校





特集

名古屋芸大の“To Be”

伝承と革新、交わる場所のその先へ

変わり続ける世界の中で、大学は何を抛りどころに、どのように存在していくのか。

來住尚彦学長が掲げた「伝統＝伝承＋革新」という言葉を軸に、
名古屋芸術大学はいま、未来に向けて動きは始めている。

來住尚彦学長は、伝統を守りながらも変化を恐れない大学像を描く。

津田佳紀副学長は、激変する世界の中で“大学のTo Be”を、大学がどう社会に存在するかを問い、
思考の基盤と教育の構造を再構築しようとしている。

長谷川喜久教授（美術）は、アートを社会に開き、作品が生まれる「場」そのものを問い直す。

大内孝夫教授（音楽）は芸術を通して人が育つという教育の原点を語る。

伝承と革新、そのあいだにある今を見つめながら“新しい名古屋芸大”を探る。



來住尚彦 学長インタビュー

「伝統＝伝承＋革新」の未来像

「伝統とは、伝承プラス革新である」

そう語る学長の言葉には、70年の歴史を誇る本学が、次の時代に向けてどう変わるべきかというビジョンが込められている。

アートと社会、教育と市場、そして

学生一人ひとりの未来をどう結びつけるのか。

放送局から音楽プロデューサー、そしてアートフェアの主宰者へ。

プロデューサーとして培ってきた経験と哲学をもとに、

來住学長が語る、名古屋芸術大学のこれから。

來住尚彦 (きし なおひこ)

1985年、早稲田大学理工学部卒業。株式会社東京放送（現TBSホールディングス）に入社し、オーディオエンジニアとして音楽番組制作に従事。1996年にライブハウス「赤坂BLITZ」、2008年にエンターテインメントエリア「赤坂サカス」の立ち上げに携わる。2015年、一般社団法人アート東京を設立し、東京・京都・大阪などでアートフェアの企画およびプロデュースを行っている。2024年4月名古屋芸術大学学長就任。



放送局-エンターテインメントの現場からアートの現場へ

「大学卒業後、TBSに入社。ほどなくして退社を考えるようになりました。きっと、自分で仕掛けて、人と人とを繋いでいくことが性に合っていたのでしょうね。」と笑う。來住学長にとってすぐ辞めるつもりでいた会社に留まった期間は、ある意味で寄り道であったが、財産にもなった。音楽番組やイベントの現場で「どうすれば観客が集まり、どうすれば資金が回るのか」という生きた感覚を学び取った大切な時間にもなった。「自分自身が本当にやりたいのは目の前の番組作りではなく、人を動かし、お金を循環させ、社会に仕組みをつくることだった。」と振り返る。

來住学長のアートとの接点は、自ら制作することではなく「アートフェアを企画制作運営すること」から始まった。では、アートフェアとは何かと問うと、來住学長は「音楽フェスととても似たものです。」と答えた。

「サマーソニック（大型音楽フェス）などと同じです。海外からアーティストを集めて観

客を呼び、そこで音楽を届け、感動と商品を与える興行。それと全く同じ仕組みで、アートフェアは世界から作品を扱うギャラリーを集め、富裕層を招き、そこで素晴らしい作品を売る。根本は何も変わらないのです。」

重要なのは「仕組みを設計すること。どのように人を動かし、どのように資金を循環させるか、その視点を持ち込んだ。アーティストやギャラリーと信頼関係を築く過程で、來住学長は単なるマーケット運営者から「アートとアートマーケットを理解する存在」へと認められていったのだ。

「音楽家と長く付き合ってきたから、アート作家にも“この人は理解してくれる”と思ってもらえたのだと思う。アーティストが私を信用してくれたから、ギャラリーも信用してくれるようになったのです。」と來住学長はつぶやいた。

アートの価値をめぐって

來住学長が繰り返し強調するのは、アートにおける「価値」と「価格」を切り離してはいけないという点である。

「学校はアカデミー、マーケットはエコノミー。日本ではアカデミーが上でエコノミーが下。でも本来は並んでいなくてはならない。アートはその二つの真ん中になくてはならないのです。」

來住学長は芸術と経済、その両者をどう結びつけるかに、大きな関心を寄せ、しばしば、千利休をその象徴として挙げてこう言うのだ。

「千利休。まさに“価値を価格に変えた”人なのです。『美しい』という感覚を、経済の言葉に置き換えた。それによって文化が発展、流通しました。」

茶の湯を通して、侘び・寂びという精神性を美学として高め、それを商人たちと共有できる形式にまで洗練させた。茶道具や空間の美が「価値」として認められ、さらに茶器に「価格」が与えられたとき、初めてその美は社会の中で流通し人々の意識を変えた。來住学長は、そこに「日本文化がかつて持っていたアートの力」を見出したのである。

「ところが現代日本では、価値と価格が切

り離されてしまった。学問としての芸術はあるけれど、社会の中で経済的な力を持つことができていない。それでは、アートは生きていくことができない。」

だからこそ、來住学長は名古屋芸術大学の教育にアートの視点からの「経営」や「経済」を導入しようとしているのだ。価値と価格を両輪で回さなければ、芸術は社会で機能しない。学生たちには、“なぜこれが美しいのか”、さらに“どうすればそれが人に届くのか”を考えて欲しいという。

アートとは、表現することで終わらない、社会の中で生き続ける仕組みをつくることが大切である。千利休が茶の湯を通して美を社会に根づかせたように、來住学長も名

古屋芸術大学という教育の場で、芸術を社会に循環させる仕組みを生み出そうとしているのだ。

ゴールの多様性

アートの価値は、社会に出て初めて確定する。それを経済という文脈に乗せる力を同時に学ばなければ、せっかくの創造性も届かない。学生たちが自分の作品の価値を自ら定め、他者に伝えられるようになることこそ、芸術教育の本質といえる。そして、その行き着く先は何か、ゴールは多様だと來住学長は言う。

「美術館に作品が収蔵されることは、もちろん一つのゴールです。けれど、それだけが

道ではない。地域社会に根づき、お店や公共施設に作品を置かれ、人々の日常に溶け込ませている作家もいる。あるいは、IPとして海外でフィーチャーされることも一つのゴールでしょう。アートの道は一つではなく、ありすぎるほどに多岐多様なのです。」

「多様なゴールを学生に提示すること」こそが大学の使命と來住学長は語る。

「複数のゴールを示し、“君はどこに行きたいのか”を考えてもらう。大学とはそうした選択肢を具体的に提示し、学生が自分自身で己の道を描けるようにする場所なのです。」

「伝統＝伝承＋革新」大学の未来像

大学の伝統と革新の未来

大学の将来像を語るとき「伝統」という言葉が使われる。ただしそれは、単に過去を守ることを意味しない。

「伝統は伝承プラス革新です。」

この考え方に至った背景として、來住学長は歌舞伎の舞台を例に挙げる。

「歌舞伎だって最初は屋外公演から始まり、その後、雨が降ったらどうするか、と工夫を重ね、ロウソクから電気照明に変わった。それによって演出が変わり、新しい表現が生まれました。伝承されてきた型を守りつつも、その時代ごとの技術や環境に応じて変化を取り込むことこそが即ち“伝統”なのだと思います。」

そして、名古屋芸術大学の70年の歴史をどう継承し、進化させるかについて、來住学長はこう強調する。

「創立者である水野^{とし}銈子先生がつくられた伝承はしっかり受け継ぐ。同時に、今のテクノロジーや時代の要請に応じて新しい仕組みを加えていく。それが名古屋芸術大学の未来を輝かせる方法なのだ。」

そして「名古屋芸術大学を作るのは私ではない。今の学生や若い世代が作るのです。彼らが社会に出たとき、自分たちが在学していた時よりも名古屋芸術大学が輝いていなくてはいけません。」と熱く語る。

伝統をただ保存するのではなく、未来の学生と卒業生の手によって革新を重ねていく。そのための準備が進められている。

領域ごとの展望 (5年後の大学の姿)

■音楽領域

従来のクラシック教育にエンターテインメント性を加え、「演奏者＝プレイヤー」から「舞台を総合的に創り上げるアーティスト」へと育成の軸を広げる。これまで“演奏者＝プレイヤー”として技術を磨く教育に加え、観客を惹きつけるステージ演出やパフォーマンス力を学ぶ機会を提供する。たとえば、クラシックの枠組みを保ちながらも照明や舞台美術と組み合わせ、総合的に「舞台を創る力」を養う。純粋な演奏技術を超え、聴衆に新たな体験届けられるアーティストを育成する場として確立する。

■美術領域

作品制作の力に加えて、市場でどう評価されるかを理解する教育を強化する。学生にはまず多くの作品を見ることを求め、さらにさまざまな場所での展示、また、できれば他の作家の作品を所有するを経験させる。こうして「好き嫌い」と「価格」の二軸で価値を体験的に学ぶ。複数のゴールを提示し、自らの進路を主体的に選び取れる力を育てる。

■デザイン領域

「日本のデザインは優秀なのです」と断言する。愛知の“ものづくり”の土壌を背景に、日本独自のデザイン思考を世界に発信することが名古屋芸術大学の使命だと位置づける。「デザインは共通言語です。思想を伝え

る手段であり、国境を越えて理解される可能性を持っている」。日本のデザインが持つ考えを「ジャパニーズ・デザイン・シンキング」として体系化したい。簡潔さ、余白の美、機能と精神性の共存といった日本文化に根ざした思想を、海外の学生に学んでもらい、また母国へ持ち帰らせる。授業の英語化も検討する。

■教育学部

附属幼稚園を擁する教育学部は、名古屋芸術大学ならではの特色を持つ。芸能事務所が築いてきた育成法に注目し、それを教育学に接続する構想を描く。幼児教育の場で表現を学び、さらに芸術的なメソッドを組み合わせることで、子どもの感性や表現力を伸ばす新しい教育モデルを目指す。学生の吸収力を活かし、従来の教育者像を超えた「芸術性と表現力を備えた教育者」を育成する。

「あなたの存在こそが尊い。できるできないは関係ない。唯一無二であることを信じてほしい」。

來住学長の言葉は、すべての領域に共通する教育理念を示している。各領域、それぞれ異なる道を歩みながらも、学生一人ひとりを「唯一無二の人材」として尊重し、社会につなげる。それこそが名古屋芸術大学の教育スタイルなのである。

津田佳紀 副学長インタビュー

名古屋芸術大学の“To Be” 伝承と革新、 來住学長の理念とともに 大学の存在を再構築する

津田 佳紀 (つだ よしのり)

教授 / 副学長 / アドミッションセンター長

1980年代よりメディアアートやメディアデザインについて制作、研究している。主な展覧会として「Japanese Art After 1945: Scream Against the Sky」※1 (グッゲンハイム美術館他)、「第3回フランクフルト国際現代美術トリエンナーレ」(フランクフルト クunstフェライン)、「(共有)さ



れる視線」(東京都写真美術館)、「マニエラの交叉点—版画と映像表現の現在—」(町田市立国際版画美術館)、「COLD_SCHOOL MS004: 講義としての芸術」(名古屋大学 豊田講堂) などがある。

(※1岡崎乾二郎との共同制作)

名古屋芸術大学の今後 世界の構造が変わる中での大学の位置づけ

“改革の準備”という現在地

「今、大学というものの“立ち位置”が問われていると思います。AIの登場、戦争、社会の仕組みや世界の構造も大きく変わりつつある。世界の経済や文化の中心が多極化し、日本が必ずしも“中心”ではなくなる時代に入っている。そうした中で、名古屋芸術大学が“どこにいるのか”、つまり大学としてどう存在するのかを、明確にしておく必要があるんです」。

津田副学長の言う『To Be』とは、単なる理想像ではなく、変化の時代における大学の存在理由を問う言葉である。

津田副学長は、來住尚彦学長の掲げる『伝統＝伝承＋革新』という考え方を軸に、大学の未来像を具体的に描く。

「來住学長は“日本のデザインは優秀である”と断言しています。それは単に技術や形が優れているという意味ではなく、背景にある思想、つまり“考えるデザイン”としての

価値が高いということです。日本のデザイン思考には、簡潔さや余白の美、機能と精神性の共存といった独自の文化的文脈がある。それを“ジャパニーズ・デザイン・シンキング”として再定義し、世界に伝えていくことには需要があると思います。地域性を大切にしながら、世界とつながっていくこと、それが大学の将来像だと思っています。AIの進化も、国際情勢も、予測の範囲を超えている。だから今の段階では、変革そのものよりも“変われるための準備”を整えることが大事なんです」。

津田副学長は、名古屋芸術大学の現在地を『変革の準備』と表現する。

「焦って新しい制度や方針をつくるよりも、まずは変化を受け止めるための“思考の基盤”を鍛えることが必要です。社会が動くときに、何をどう見るか。それを支える考え方の基礎をもう一度、見直す時期にきています」。

それは、大学の教育全体の構造を問い直

すことでもある。

「専門教育を横断する“基礎”の部分を組み立て直す。変化を理解し、自分で考え直す力を持つ学生を育てる。その基盤があって初めて、新しい大学像が見えてくと思います」。

学長が語る『伝統＝伝承＋革新』という理念は、受け継ぐだけではなく、常に見直し、更新し続けることを意味する。それが、名古屋芸術大学が社会において存在感を持ち続けるための条件であるという。

メディアの変化に応答する大学

『変化に適応する大学』とは、単に社会の動きに追従する大学ではない。

「メディアは、私たちが世界をどう理解するかを形づくるものです。新しいメディアが生まれると、感じ方や考え方の構造が変わります。メディアの変化は人間の認識や思考の再構築を促します」。

大学は、その変化を観察し、翻訳し、次の世代に渡す場所であるべきだという。

「新しいテクノロジーに振り回されるだけではなく、そこにどんな新しい思考の可能性があるかを見極める。芸術大学は、その変化を読み解く場所でもあると思います」。

それは学長の『価値を社会に接続する』という考えの基盤になるもので、社会と思

考の接点を模索するものである。芸術を社会の外に置かず、社会の構造を読み解く知の装置として機能させる。大学を社会と世界の中でどう機能させるか、一つの答えといえよう。

「名古屋芸術大学は愛知に根ざした大学です。この地域の文化的なストックの上に立ち、その経験を世界の中で新しい文脈と

して発信していく。地域に立脚しながらグローバルとつながる。それが、今後、大学が目指すべき姿だと考えています」。

地域性と国際性の両立、伝統と革新の両輪、その両方を行き来できる柔軟さを持つことが、来住学長・津田副学長が志向する名古屋芸術大学の未来像である。

デザインとメディア、思考を鍛える教育へ

基礎デザインの再構築、 広がるデザイン思考

デザイン領域で、今後進められる改革のひとつが、教育の根幹にある『基礎デザイン』の再構築である。

「科学に基礎研究と応用研究があるように、デザインにも“基礎”があります。それは、どんなデザイン分野でも共通する考え方の仕組みです。けれど、時代が変わればその基礎も更新しなければいけない。デザイン領域では1年次にデザイン基礎（ファンデーション）というカリキュラムを30年以上前から取り入れています。長期的視点で見ても有効なカリキュラムとして構築されていますが、近年では新しい考え方も出てきて、デザイン基礎の内容をアップデートしたいという意見もあります」。

デザインとは単なる形の操作ではない。

「デザインは、ものごとを理解するための思考の方法なんです。社会や技術の動きを前向きに受け止めながら、ものごとの構造を読み取り、再構成していく。その柔軟な思考力でこそ、これからの時代を支える基礎になると思います」。

守るべき基礎を持ちながら、それを時代に合わせて書き換えていく。

「デザインという言葉が指す範囲は、どんどん広がっています。以前は、“もの”をつくることがデザインでした。でも今は、情報や空間、環境、制度、コミュニケーション……、社会のあり方そのものをデザインする時代になってきています。デザインは社会の仕組みを考える力なんです」。

デザイン領域ではその拡張を積極的に受け入れ、教育の中心に据えようとしている。

「専門領域を超えて考えることが当たり前になってきています。グラフィックも、プロダクトも、空間も、そして人と人との関係さえも、デザインの対象になってきている。そ

の幅の広さを取り込むようにしてきましたが、さらにそれを進めることになります。こうした垣根のない広がりが名古屋芸術大学の強みになっていくと思います」。

学長が語る『伝統＝伝承＋革新』という理念を、教育現場でさらに広げ『考える力』として置き直していく。

“考える力”を鍛える場として

先端メディア表現コースでは、映像、インタラクティブ、デジタル技術などを活用しながら、新しいメディアが人の思考にどう作用するかを探る試みが続いている。

「メディアは、単に情報を伝える手段ではありません。先端メディア表現コースではアニメやゲームの業界に進んだ卒業生がいますが、他方ではメディアを社会のためにどう役立てるのかを思考し、メディアを使った社会の進化を担う仕事に就いた卒業生たちもいます。生活の中の理解の仕組み（eureka）を、メディアを使って強化すること。メディアの変化は人の行動を変化させますが、その際に文化も変わるんですね。文化の変化の風下には、デザインの変化があります。そのような変化に対して、常に敏感でありながら社会と対峙するためには枝葉末節の技術に依存するだけでは無く、ベーシックな基礎デザインという部分を鍛えておく必要があると思っています。テクノロジーが発達しメディアが変わるたびに、世界の見え方が変わる。それに応じて、自分の発想も変えていけるようにしておく。それが“思考を鍛える教育”の本質だと思います」。

多言語化と異文化理解、 世界に出ていく準備

『思考のデザイン』を支えるもう一つの柱、それは多言語化への対応だ。来住学長もこの点を強調する。

「東海地区は外国籍の居住者が多い地域で、名古屋芸術大学のキャンパスもすでに多文化空間になりつつあります。これからは、英語を学ぶだけではなく、いろんな言語が飛び交う環境でコミュニケーションできる、クロスカルチャルな学習環境を整えることが重要です」。

異なる言語に触れることは、異なる文化に出会うことでもある。

「英語だけでなく、他の言語を通して異文化を知ることは、自分の考え方を見直すきっかけにもなります。言語の違いが、むしろ世界の捉え方を広げてくれる。その経験を積んで欲しいし、そんな環境になっていくと思っています」。

大学の中で『世界に出ていく準備』ができること。それが、今後重要になってくるという。

「名古屋芸術大学は、地域の文化を受け継ぎながら、世界の変化に呼応していく。その両方を行き来する大学であることが大切です。芸術大学は“社会を映す鏡”でもあります。社会の変化を冷静に観察しながら、自分たちの立ち位置を問い続ける場所です。基礎を見直し、思考を鍛え、地域と世界の両方に目を向ける。その営みを積み重ねていけば、きっと次の時代に通じる大学になれると思っています」。

地域に根を張る大学であること、そして世界の変化に対して開かれた大学であること。その両立こそが、名古屋芸術大学の『位置づけ』であり、目指す未来像である。

「大きな改革よりも、日々の小さな更新を積み重ねていく。その繰り返しの中で、大学の未来は少しずつ形を変えていく。それが大学らしい変わり方だと思っています」。

学長の理念と副学長の実践が重なり合う場所に、名古屋芸術大学の未来『To Be』のかたちが、確かに見えている。



クラシックとエンターテインメントのあいだで、音楽の未来を創る

大内孝夫 (おうち たかお)
教授 / 音楽領域主任

1984年、慶應義塾大学経済学部卒業。みずほ銀行に入行し、支店長、銀行等保有株式取得機構運営企画室長などを歴任。全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）評議員、日本弦楽指導者協会（JASTA）顧問、名古屋音楽学校アドバイザーなどを務める。

著書に『音大崩壊』『音大卒』は武器になる』『音大卒』の戦い方』（ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス）、『AI時代最強の子育て戦略「ピアノ習ってます」は武器になる』（音楽之友社）がある。



AIが答えを出す時代に人は何を学ぶのか

音楽大学の存在意義が問われている。

ピアノやヴァイオリンを学ぶ学生が減り、全国の音大オーケストラが維持できなくなりつつある。大内孝夫教授は、自著『音大崩壊～音楽教育を救うたった2つのアプローチ～』の中でそうした現実を見据えつつ、崩壊させないために何をすべきかを問い続けてきた。

「20年前、音大生は全大学生の約2%を占めていましたが、いまは1%を切っています。これは単なる少子化の問題ではなく、社会全体が“芸術の学びの価値”を見失いつつある現象なんです」。

AIが作曲し、演奏を自動化できる時代に、人間の学びはどこに残るのか。

「AIが発達すれば、複雑な計算や理論はAIがやるようになります。でも、AIには美しいと感じる心はない。人の心を動かすものを創るのは人間だけです」。

音楽教育は、単なる技能訓練ではない。人の感情を理解し、他者の心を動かす力を育てる場である。大内教授は「人間のアイデンティティとは、美しいものを美しい、おいしいものはおいしいと感じること。喜怒哀楽や共感・反感などの感情があること」と語る。

音楽で学ぶことは、決して音楽だけに使えるスキルではない。大内教授は、このことを繰り返し述べてきた。

「先生とマンツーマンで学ぶことで、年齢の離れた人と対話できるコミュニケーション力が身につきます。演奏会という締め切りに向けて練習を重ねる中で、目標設定、

工程管理、期日管理も自然と覚える。礼儀、正確・丁寧さ、段取りのコツ、すべて音楽から学べる力です」。

それに加え、AIが『正解』を導く時代にあって『答えのない問いに向き合う力』こそ、これからの社会に求められる学びであると語る。

「これからは、答えのない世界で“最高のもの”を考え出せる人間が生き残る。芸術とはまさに、その“答えのない最高”を追求する営みなんです」。

プレイヤーからアーティストへ、学長の方針を受けて

名古屋芸術大学の音楽領域には、他の音大にはない強みがある。

「名古屋芸術大学は音楽だけじゃない。舞台芸術、美術、デザイン、映像、照明などがある。芸術を“掛け合わせる”ことができます。音楽と美術、音楽とデザイン、あるいは音楽とテクノロジー。掛け合わせることでまったく新しい表現が生まれる。それが芸術大学の特権です」。

そうした環境を背景に、来住学長は『見せる力』を加えようと考えている。これまで音楽教育、とりわけクラシックの世界ではエンターテインメント要素を加えることをタブー視していた時代が続いていた。そうしたこれまでの在り方をアップデートしようという取り組みが始まっている。照明や舞台美術と組み合わせ、『ステージを創る』ことまで学ぶことのできる場所、純粋な演奏技術を超えて観客に新たな体験を届けられるアーティストを育てる場所、大学を新しい学びの場所へ位置づける。

大内教授はこの方針を『演奏者＝プレイヤー』から『舞台を総合的に創り上げるアーティスト』へと広げる教育の方向性と受け止

めている。

「クラシックの枠を保ちながらも、観客を惹きつけるステージ演出やパフォーマンス力を学べる場にしたい。クラシックだけが音楽じゃない。ジャズやロック、声優も、真剣にやれば人の心を動かせる。多様な芸術にさまざまな面からアプローチできることこそ、名古屋芸術大学の強みです」。

音楽を“社会に届ける”学びへ

大内教授は、音楽の価値を技術だけではなく、体験にも見出す。

「演奏が上手いだけでは公演に人は来ない。楽しくなければステージじゃない。どうやって観客に届けるか、自分をどうブランディングするかを考える力も育てていきたいです」。

音楽もまた、社会と共鳴してこそ生きる。学生が自分のステージを企画し、観客と対話しながら新しい音楽の形を探る。そうした学びを大学が支援する体制を整えていきたいという。

「小さな成功体験を持たせることはできる。できなかったことができるようになる、その繰り返しで自信になり、学ぶ意欲になっていくと思います」。

成果だけではなく過程を見守り、一人ひとりの達成を喜び合う。どうしたら伝わるか、人の心を動かすことができるかの体験を通して学ぶ環境をさらに充実させたいという。

AIの時代だからこそ、心を扱う芸術の意味が高まる。さまざまな音楽を核としつつ、他の領域も横断しながら音楽を『社会の中で生きる力』へと変えていく。

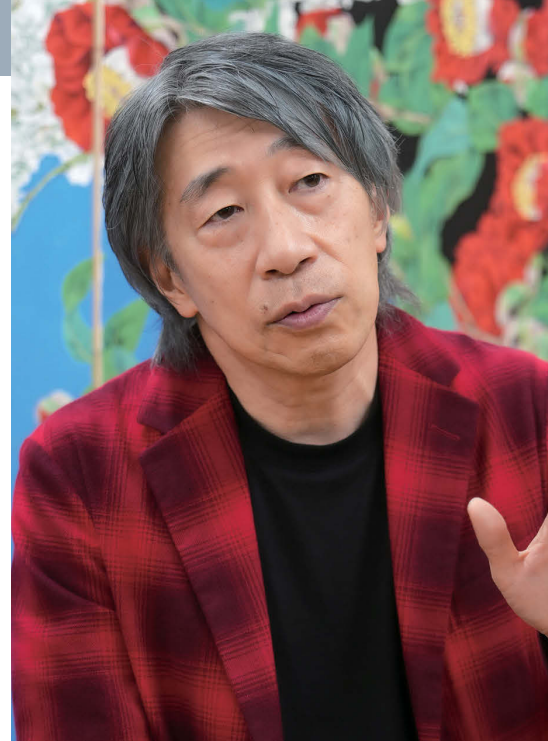
「演奏を見せるだけではなく、人を幸せにする音楽をどう届けるか。その力を育てたい。音楽が人の心を動かす限り、音楽大学の存在意義はなくならないと思っています」。

価値と価格の間にも、 学びがある

長谷川喜久 (はせがわ よしひさ)
教授/美術領域主任 (日本画コース)

1988年金沢美術工芸大学大学院修了。上海美術館や岐阜県美術館、古川美術館などでの大型展示を展開しながら、建仁寺塔頭両足院の為の花鳥図屏風(2016年)や瑞龍寺塔頭天澤院の迫力ある双龍図襖絵(2019年)というトラディショナルな仕事もこなす。

また野口五郎氏が発表した数々のヒット曲から着想を得た展覧会や空想の動物園をテーマにした展示などプロデューサーとしての活動も多く、従来の日本画家のイメージを大きく飛躍させている。



アートが社会と つながるための場所

名古屋芸術大学の美術領域が、百貨店・松坂屋と連携して開催するアートフェア『artists N,G,Y』は、学生と卒業生の作品を実際に販売する取り組みとして注目を集めている。大学が主導して作品を『売る』という行為は、これまでの芸術教育の枠を一步超える試みだ。

「作品をつくるということ自体はもちろん素晴らしいことです。でも、他者が関わることで生まれる価値というのは、それとはまったく別の次元なんです。自分が描いた作品が、誰かの手に渡り、その人の生活の中で意味を持つ。その瞬間に、学生たちは“自分が社会の中で存在している”という感覚を初めて実感するんです」。

長谷川教授は、この『他者との関わり』こそが芸術教育において欠かせない体験だと語る。

『artists N,G,Y』は今年で3回目を迎えた。初回は松坂屋南館オルガン広場、3回目の今年度は、大きく規模を拡大し8階フロアを全面的に使った構成となった。

「今までは、美術大学が“作品を販売する”ということ自体、あまり考えられてきませんでした。でも、作品が社会に出て、さまざまな場所で人の手を経ていくことで、また新しい価値を持つ。その仕組みを学生時代から体験できる場が必要だと思ったんです」。

來住学長が語る『価値と価格の両輪』という考え方を、美術領域は具体的に具現化している。

「価値だけを追い求める理想論でもなく、価格だけを見る商業主義でもない。その中間にある“社会との接点”を、学生が自らの手で掴む。それがこのアートフェアの意義で

はないかと思います」。

來住学長は、美術領域に対して「作品制作の力に加えて、市場でどう評価されるかを理解する教育を強化する」と語っている。学生にはまず多くの作品を見せ、展示や販売など多様な場で作品がどう受け止められるかを体験させる。さらに、可能であれば他の作家の作品を『所有する』ことも勧めている。『好き嫌い』と『価格』という二軸で価値を体験的に理解することで、学生が自らの進路を主体的に選び取れる力を育てる。そうした理念を、長谷川教授はこのアートフェアを通して実践している。

“売る”という行為の 向こうにある学び

芸術の世界には、長く『作品に値段をつけることは俗っぽい』という意識があった。しかし、それを乗り越える時期に来ているのではないだろうか。

「アートは、本来自分の内面を純化させて表現する営みで、そこに数字を持ち込むことへの抵抗感は確かにありました。でも、学生たちはこのあと社会に出ていく。そのときに“自分の作品の価値をどう伝えるか”を知らないままでは、次の一步を踏み出せません」。

実際に販売を通して作品が他者の手に渡ると、学生たちは大きな変化を見せるという。

「値段をつけ、誰かが自分の作品にお金を払うという行為は、学生にとって想像以上に大きな経験です。“自分の作品には意味がある”と確信できた瞬間に、表現の質も変わる。このフェアは、そうした“自信の起点”を作る場になっているんです」。

それは、來住学長が語る『価値を社会に

循環させる教育』にも通じる。アートを社会に開き、他者の目に触れさせることによって初めて『意味』が生まれる。作品が『個人の表現』から『社会の共有財産』へと変わる、その実感である。

「作ることが目的でもいいんです。でも、誰かに見てもらうことで生まれる次の表現がある。学生や卒業生がその体験を積み重ねていけば、自分の活動を社会の中でどう位置づけるかが見えてくる」。

多様なゴールを示す教育へ

アートフェアは、学生と卒業生だけでなく、卒業生、また一度活動を中断した作家たちの場にもなりつつある。

「卒業生の中には、一度制作を止めてしまった人もいます。でも、もう一度作品を社会に出したいと思う人たちが戻ってこられる場としても、意味のあることだと思っています」。

そしてその広がりには、『アートのゴールは一つではない』という考えと重なる。

「美術館に収蔵されることも、誰かの家に飾られることも、公共空間で人の心を癒やすことも、どれも正しいゴールです。アートは“自分のため”だけでなく、“他者のため”にもある。学生たちがそう実感できるような環境を整えるのが、大学の使命だと思っています」。

作品を作り、社会に送り出すこと。表現技術を守りながら、時代の中で新しい出会いを生み出す。『artists N,G,Y』はその象徴的なプロジェクトといえる。



科学をアートで伝える、 先端メディア表現コース×名古屋市科学館 「メディアアートで科学の魅力を伝えてみた！」

デザイン領域先端メディア表現コース3年生は、名古屋市科学館とコラボレーションし、「メディアアートで科学の魅力を伝えてみた！」を開催しました。2025年10月4日(土)・5日(日)の2日間、名古屋市科学館 生命館地下2階サイエンスホールにて、学生たちが制作したメディアアート作品を展示。工作や実験を通して科学の楽しさを体験できる「青少年のための科学の祭典(名古屋大会)」と同時開催され、親子連れを中心に多くの来場者で賑わいました。

会場には、プログラミングを用いたゲームや、身体を使って楽しむアトラクションなど、学生たちの自由な発想から生まれた作品が並びました。どの作品にも共通していたのは、「科学を難しいものではなく、触れて感じられるものにしたい」という思いです。

北村菜々さんの作品「周期表の中から探し出せ! Gen Search」**1**は、元素周期表をテーマにしたゲーム作品。北村さんは「周期表の並び方がすごく美しいと思っていて、それを小さな子にも感じてほしかった」と話しま

す。画面に映し出された元素を探し出すアクションゲームで、遊びながら化学の世界に親しめるようになっていきます。子どもたちに大人気で、何度も挑戦する参加者も多く、会場は笑顔と歓声に包まれました。「こんな大きな会場で多くの人に自分の作品を体験してもらえるのはとても嬉しいです」と北村さんは語りました。

寺本和奏さんの作品「深海散歩 一いざ、未知の世界へー」**2**は、暗室を使った空間インスタレーション。吊るされた深海生物の模型とジオラマで深海を再現し、ブラックライトを当てると光る蛍光塗料によって、暗闇に幻想的な世界が浮かび上がります。虫眼鏡を使って深海に潜むゴミを探す仕掛けもあり、環境問題にも目を向けた作品です。寺本さんは「造形に挑戦してみたくて、段ボールと紙だけで深海生物を作りました。時間はかかりましたが、空間ごと「深海」を表現できたと思います」と話しました。

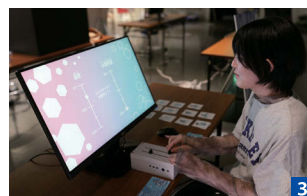
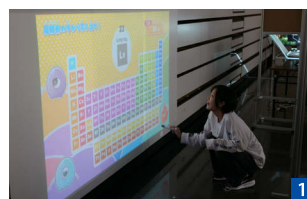
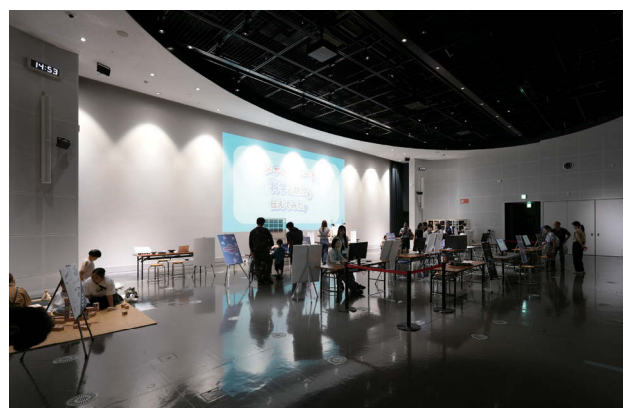
永水彩花さんの作品「雪の花を咲かせて」**3**は、温度と水蒸気量をコントローラーで設定す

ると、その条件で生成される雪の結晶を表示する作品です。生成された雪の結晶には、それぞれ異なるキャラクターがデザインされており、体験者にはそのステッカーが配布されました。永水さんは「プログラミングで自然現象を再現したいと思いました。条件を変えると結晶の形

が変わるところが科学的で面白いと思います。子どもたちが操作しながら「雪の研究者」のように楽しんでくれて嬉しかったです」と語りました。

展示を担当した加藤良将講師は「今年はコンピューターを使ったデジタル作品だけでなく、立体的な作品や、手を動かして体験できる作品が多かった印象です。ワークショップ形式のものも増え、子どもたちが家でもやってみたいと思えるような内容になったと思います。毎年、学生たちには方向性を指示せず主体的に制作してもらっていますが、今年は特に「科学をどう伝えるか」をそれぞれが考え、身近で分かりやすい表現に仕上げてくれました」と振り返りました。

子どもたちが科学の面白さを体験し、学生たちはアートを通して科学を「伝える力」を磨いた2日間。科学とメディアアートが出会うこのイベントは、名古屋市科学館とナディアパークの共催により、今後も継続して開催される予定です。





サウンドメディアコンポジションコース 公開講座 トーンマイスターワークショップ2025 —音を創造する3日間—

トーンマイスターとは

録音技術と音楽的教養を兼ね備えた音のスペシャリストを指します。単なる“録音技術者”ではなく、音楽を理解し作品の芸術性を引き出すパートナーとして、演奏家と対等に音づくりを行う存在です。ドイツのベルリン芸術大学やデトモルト音楽大学をはじめ、ヨーロッパ各国の音楽大学で養成され、現在も放送・音楽制作など多様な分野で活躍しています。

サウンドメディアコンポジションコースは、2025年10月9日・11日・12日にわたり、公開講座「トーンマイスターワークショップ2025」を開催しました。講師にはドイツ・ベルリンよりトーンマイスターのフローリアン・B・シュミット氏を招き、本学ウィンドオーケストラによる吹奏楽セッションレコーディングを通して、録音・編集・ミックス・3Dオーディオ制作までの全工程を実践的に学ぶプログラムが展開されました。

初日は、フローリアン氏による特別講義「芸術的な音楽録音とは？」からスタートしました。

「録音は音を“残す”行為ではなく、音楽を“伝える”ための創造行為です」と語るフローリアン氏。録音で最も重要なのは技術ではなく“音楽の意図”を理解することだと強調し、「マイクの位置や機材の選択も、すべてその目的のためにある」と述べました。

2日目は本格的なセッション

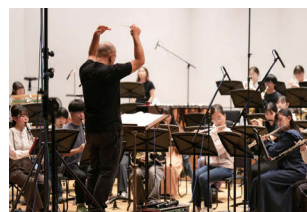
録音が開始されました。録音曲は、八木澤教司作曲の「我がゆく道を我は行くなり」と「散歩、日傘をさす女性 ― クロード・モネに寄せて」。指揮は遠藤宏幸准教授と、作曲者である八木澤教司客員教授がそれぞれ担当。長江和哉教授が「これはNUA Recordsからの正式リリースを目指す録音プロジェクトです。ライブとは違い、何度も演奏を重ねて“最も音楽的なテイク”を探るのがセッション録音の醍醐味です」と説明しました。

演奏は本学学生が担当。クラリネット4年・日比奏妙さん（コンサートミストレス／音楽総合コース）は「吹いているときの音と、録音で聴く音の印象がまったく違う。録音を意識すると表現の幅が広がる」と話しました。録音を担当した3年・柿木美祐さん（オーボエ）は「演奏者の気持ちを知らずして良い録音はできないと思い、演奏も学んでいます」と語りました。

録音エンジニアとして参加し

た3年・平野祥吾さんと深井龍心さんは、「フローリアン先生の判断の速さに驚いた」「どのテイクを使うかを瞬時に決めていくプロの現場を体感した」と振り返りました。

また、遠藤准教授は「指揮台で聴く音と録音モニターで聴く音には違いがあるが、音楽の密度や方向感は一貫していた。マイキングの精度が高く、録音の再現性も見事だった」と評価。八木澤客員教授も「学生たちが何度もテイクを重ねる中で音楽的に成長していく姿を感じた。



全体が美しく調和していた」と語りました。

最終日の午前には竹内雅一教授の指揮で「Arioso Cantabile/ Jan van der Roost」を録音。午後は「我がゆく道を我は行くなり」の編集・ミックス作業を行いました。

フローリアン氏は録音時に、各テイクの使用箇所を譜面に詳細に書き込み、それをもとに学生と共に編集を進行。冒頭部分だけでも10か所以上の編集を行い、学生たちは録音の緻密さを実感しました。

続いて、完成した音源を用いてドルビーアトモス（3Dオーディオ）版の試聴を実施。学生たちはステレオ版との聴き比べを通して、音の広がり方や距離感、ホールの空気感の違いを体感しました。

質疑応答では、学生から「ライブ録音とスタジオ録音の違い」について問われると、「実際のコンサート録音でも、リハーサルと本番のテイクを組み合わせることで作ることが多い。ライブ感と完成度のバランスを取るのがトーンマイスターの仕事」と述べました。

最後にフローリアン氏は「録音はチームワーク。完璧を一人で求めるのではなく、全員で音楽を作ることが大切」と締めくくり、長江教授は「音を空間で感じる体験を通して、学生が録音を“芸術”として捉えるきっかけになったのでは」と総括しました。





“アートは今と未来”を描く 「artists N,G,Y 2025」松坂屋名古屋店で開催

2025年8月27日(水)、松坂屋名古屋店8階「ART HUB NAGOYA open gallery」にて、名古屋芸術大学と松坂屋名古屋店が主催するアート展「artists N,G,Y 2025～アート、今、未来～」と、美術領域日本画コース卒業生による作品展「Next stage X」が開幕しました。会場には関係者や来場者が集まり、盛大にオープニングセレモニーが行われました。

「artists N,G,Y 2025」「Next stage X」は、2025年8月27日(水)から9月2日(火)まで開催。名古屋芸術大学の学部・大学院の在学生62名が出品し、日本画、洋画、現代アート、工芸、コミュニケーションアートなど幅広いジャンルから305点の作品が展示され、高校生や地域ギャラリーとともに“アートの今と未来”を発信していました。

セレモニーでは、冒頭に來住学長が挨拶し「アートには心を豊かにする価値と、市場で評価されていく価値の両面があります。高校生や若いアーティストにとって、いつか自らの作品が大きな価値を持つ日が訪れる。その未来は決して夢ではありません」と語り、若い世代の挑戦に期待を寄せました。また、今回の企画は長谷川喜久教授を中心に、多くの教職員と学生の協力によって実現したことも紹

介されました。

続いて、執行役員松坂屋名古屋店長の齊藤毅氏が挨拶。「昨年12月にリニューアルした『ART HUB NAGOYA』は、百貨店のワンフロアを丸ごとアートに特化した全国でも珍しい空間です。社員一人ひとりの思いが込められたこの場所を、ぜひ最大限に活用していただきたい。」と述べ、「作品には作り手の想いが込められており、来場者と共有することで新しい意欲が生まれます。『生活と文化を結ぶ松坂屋』という昭和の頃からのキャッチフレーズの通り、それを体験していただく場を、今後とも共に広げていきたいです。」と開催への期待を述べました。

今回の展覧会には、GALLERY CLEF、GALERIE hu、gallery UGが出展ギャラリーとして協力。また、私立岡崎城西高等学校、愛知県立東郷高等学校、三重県立飯野高等学校が出展高校として参加しています。各校の代表教員は「生徒にとって刺激的で学びの多い機会」と感謝の言葉を述べました。さらに、後援団体としてCBCラジオ常務取締役の川崎朗氏がスピーチし、「テレビやラジオを通じて、このイベントの魅力を広く発信していきます。期間中はニュースやラジオ生中継でも取り上げ、多

くの方々にアートの力を届けたい」とコメントしました。

來住学長は今回の企画について「この展覧会は“時空の広がり”をテーマにしています。高校生から卒業生まで異なる世代が一堂に会することで互いに刺激を与え合い、次のステップを意識できる場にしました。」と説明。作品数は過去2回を大きく上回り、本格的なエキシビジョンとなったことを強調しました。「高校生は大学生に、名古屋芸術大学の大学生はギャラリストに質問し合うことで互いに刺激を受け、アートシーンの一員である自覚を持ってほしい。」と期待を込めました。

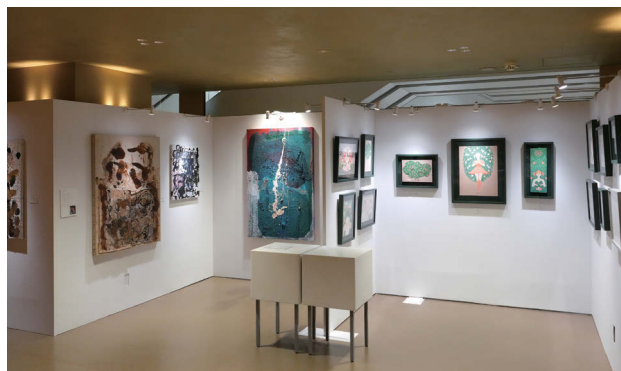
長谷川喜久教授は「学生たち

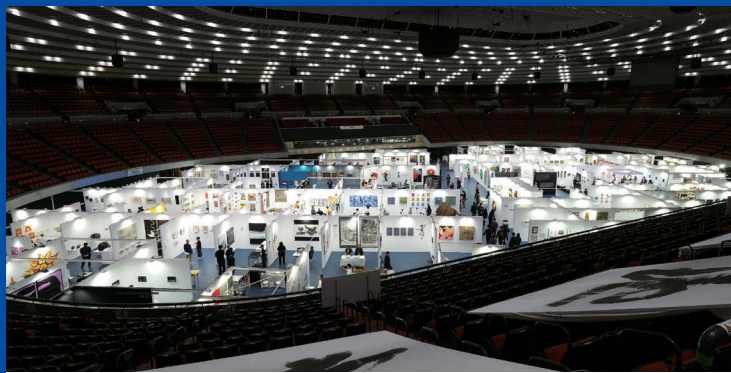
の熱意は非常に強く、展示準備の段階から会場は熱気に包まれていました。その達成感は作品にも表れています。制作から展示、販売までのプロセスを大切に積み重ねてきたことが、観る人に伝わる力になっています。高校生の参加もあり、まさに“今の感性を示す機会になりました。」と語りました。

津田佳紀副学長は「会場はまるで広場のように一体感のあるワンフロアの空間で、300点を超える展示作品が見渡せます。今後は空間デザインの面からも大学が関わっていききたい。」と述べました。

萩原周芸術学部長も「これだけの規模で外部展示を行うのは大学として初めて。迫力があり、作品のクオリティも高い。テーマ性や表現の強さが伝わる作品が増えました。」と評価。「アートとデザイン、工芸との境界はなくなりつつあります。今後は垣根を越えた多様な表現がもっと広がる可能性を感じます。」と学生たちの挑戦に期待を寄せました。

世代を超え、卒業・修了生と在学生、さらに高校生の作品が並ぶこの展覧会は、“アートの今と未来”を発信する場となり、名古屋芸術大学の歩みと新たな挑戦、そしてさらなる広がりを予感させる展示となりました。





「OSAKA INTERNATIONAL ART 2025」に 大学院生、卒業生が出展、作品を展示

2025年5月31日(土)～6月1日(日)に來住学長が総合プロデューサーを務める国際的アートフェア「OSAKA INTERNATIONAL ART 2025」が大阪市中央区の大阪城ホールにて開催されました。このアートフェアは、大阪・関西万博で世界各国から訪れる要人をお迎えする「迎賓館」というパビリオンのアートプロデュースも担当した來住学長ならではの配慮もあり、本学大学院美術研究科の在學生や修生も出展が叶い、作品を展示することができま

した。(大阪・関西万博でも來住学長の配慮により、未来につながる場として迎賓館の作品展示に在學生が関わることができています)。

「OSAKA INTERNATIONAL ART 2025」は各国大使館・領事館が推薦する海外・国内合計115のギャラリーが一堂に会し、現代アート、古美術、近代美術、工芸、デジタル作品などを展示・販売するアートフェアで、開催日前日の2025年5月30日(金)にはプレスビューが行われ、出展

者のコシノジュンコさんとともに來住学長がメディア対応し、「ものには価値と価格という2つの側面があります。日本人は価値を認めることはありますが、それを価格に転換することが苦手だと思います。日本の文化は素晴らしいですが、文化を経済に結びつけるということも重要です。『大阪でアートを買おう!』というキャッチコピーにしましたが、皆様に珠玉の作品に出会ってぜひ持って帰っていただきたい。アーティストに代わっ

てお伝えするのがプロデューサーの使命だと考えています」と熱い思いを語りました。

出展した本学大学院の在學生や修生からは「このような展示の機会は初めてですが、こうした場でお客様に自分の作品をどう見てもらえるのか、勉強になると期待しています。」という声や、「これほど規模の大きなアートフェアに出展できるということが、すごく嬉しいです。展示されている作品を見させていただきましたが、今活躍されている作家さんならではの迫力を間近で浴びて、刺激になります。学校で描いているだけでは作家としては成り立たないな、と思うようになり、作家としてやっていきたいと決意が固まってきました、自分というものを見つけていけたらと思っています。」と大きな刺激になったようです。

アートと社会との新しいつながりを感じさせる、意義深いイベントとなりました。



オープンキャンパスの学長特別講義 「失敗を強みに変える思考法」

2025年10月4日(土)に開催したオープンキャンパスでは、本学の來住学長による特別講義を東キャンパス、西キャンパスで実施しました。テーマは「失敗を強みに変える思考法」という大学受験を目指す高校生にとっては、受験に向けた取り組みに大きな力となる内容の講義

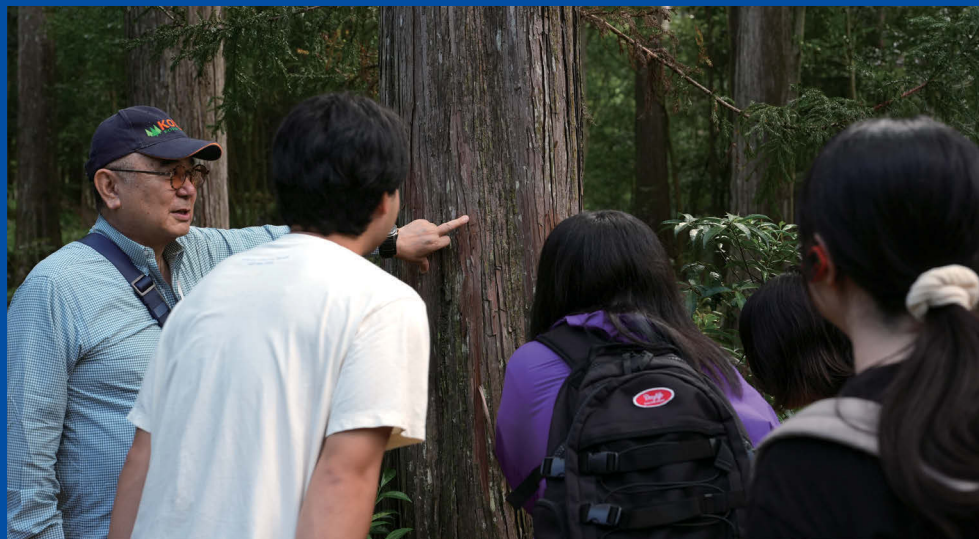
でした。

冒頭來住学長は「私は失敗したことがないのです。」と参加者に語りかけました。続けて「成功の反対は失敗ではなくて「経験」です。」と話し「立ち止まらずに改善を積み重ねることが、必ず成功につながるのです。」と結びました。

引き続き、來住学長自身の進路選択体験も紹介しつつ、「これからはさまざまな選択をする機会に出会うことになると思いますが、結果的にその時の意に反する道を選択することになったとしても、それは失敗ではなく、自分自身を形作る大切なプロセスなのです。」ということを強調しました。そして、そうした選択をする機会には正しい情報が重要な武器になることを付け加え、「情報化社会を生きる現代の若い人たちは、かつての日本の室町時代に生きた人々が一生をかけて得る情報の量をわずか1日で受け取っている。」という例を持ち出し、「常に入手する情報を整理し、自分は今後どう生きていきたいのかを考える時間を持つことが大切です。」と参加者に投げかけま

した。そして「1日1分でもいいから目を閉じて、自分自身を見つめる時間を持ってください。」と、自分を知る習慣の大切さを説き、続いて「本学が皆さまに提供できるのは「知識と経験」。それを自分の中でかみ砕いて「センス」に変えていくのは皆さま自身です。知識と経験、そしてセンスを磨くことで、社会の中で新しい価値を生み出す人になってほしいと願っています。」と語りました。

來住学長からのメッセージは参加者の皆さんに十分に届いていたようで、話を聞いていた高校生の皆さんからは「パッションを持って取り組んでいきたい。」「改めて夢に向かってがんばりたいと思いました。」などの力強い意見が寄せられました。



持続可能な森を描く イラストレーションコース、 FSC® 日本のPRコンテンツ制作に挑戦

イラストレーションコース3年生の後期授業で、新たなプロジェクトが始まりました。テーマは「森林認証制度を広めるためのPRコンテンツ制作」。依頼元は国際的な森林認証制度を運営する非営利団体・FSCジャパン（東京都新宿区）です。学生たちはマンガや絵本、アニメーションなど多様な表現方法を視野に入れ、幅広く発信できる作品づくりに挑戦します。外部講師の一人で、長年編集記者や企業広報を手掛けてきた西埜隆文さんは「読み応えのある作品が出てくると良いですね」と期待を語りました。

2025年10月1日、学生たちは三重県の速水林業を訪問しました。同行したのはコーディネーターの西埜さんと、FSCジャパンの白井聡子さんです。白井さんは「普段は企業（BtoB）に向けた活動が中心で、一般消費者に直接アピールする機会はありません。学生の皆さんからどんなアイデアが出てくるのか、とても楽しみにしています」と語り、今回の試みに期待を寄せました。

速水林業代表の速水亨さんからは、まずFSC認証について詳しい説明がありました。速水

さんはFSCジャパン副代表を務めるほか、農林水産省林政審議会委員、三重県林業振興対策審議会委員、森林組合おわせ組合長、環境省中央環境審議会臨時委員や（社）日本林業経営者協会会長などを歴任。日本の林業政策や環境行政をリードしてきた人物です。

FSC（Forest Stewardship Council®／森林管理協議会）は、世界的な森林破壊や違法伐採に対抗するため1994年に設立された国際的なNGOです。認証を受けた森林は「環境保全」「社会的責任」「経済的持続性」という3つの原則に基づいて管理されていることが保証されます。ここで生産された木材や紙製品にはFSCマークが付与され、消費者がそれを選ぶことで健全な森林経営を後押しする仕組みです。違法伐採が児童労働や貧困にも直結している現状の中で、FSCは「森から商品、そして消費者へ」とつながるサプライチェーンを透明化する国際的な認証制度として広く支持されています。イギリス王室やホワイトハウスでも公式文書にFSC認証紙が採用されるなど、その信頼性は世界的に証明されています。

速水林業は2000年に、日本で初めてFSC認証を取得した林業事業体です。戦後の拡大造林期に広がったスギやヒノキの単一植林に対し、いち早く広葉樹を混ぜる「針広混交林施策」を実践。土壌を守り、生態系の多様性を維持する森林づくりを進めてきました。こうした取り組みは国際的にも高く評価され、持続可能な林業のモデルケースとして国内外から注目を集めてきました。

山林見学では、ヒノキやスギの間に広葉樹が混ざる多様な豊かな森を歩きながら、速水さんが解説しました。針葉樹の間に自然に生えた広葉樹が土壌を肥やし、倒木や落ち葉が森を循環させていること。クスノキが防虫成分を備え、しなやかな枝で強風に耐えることなども紹介しました。学生たちは1時間半の見学を通じ、森林が単なる資源ではなく「生きたシステム」であることを実感しました。

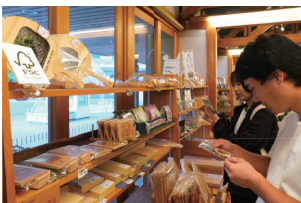
その後、速水林業と連携する

製材所・塩崎商店を訪問。ここでは木の切り方や枝の状態が材質に与える影響、節の少ない材をつくるための植林や間伐の工夫などについて学びました。塩崎商店では市場に流すだけでなく、注文に応じて山から最適な材を選び、製材所と山側が密に相談しながら提供する仕組みを整えています。京都や鳥羽のホテルからも最高級ヒノキ材の注文があり、地域の森林資源が建築や内装に活かされています。学生たちは創作に使える端材を分けてもらい、木材の手触りや重みを体感しながら、自身の表現へつなげるきっかけを得ました。

帰路には紀勢自動車道 紀北PA「始神テラス」にて、FSC認証製品が販売されている様子を見学。国際認証が日常の買い物に息づいていることを実感できたのも大きな収穫でした。

学生たちからは、「認証や森林管理は難しそうに思っていたが、山林を見学すると生活と直結していることがわかりました」「端材をいただいたので、作品にどう活かせるか考えるのが楽しみです」「アニメーション作品をつくってみたい」といった感想が寄せられ、現場体験が大きな刺激となったことがうかがえます。

このプロジェクトの最終プレゼンテーションは2026年1月14日に予定されています。FSC認証をPRするにあたり、企業を対象とするのか消費者へ訴えるのか、自然環境を前面に出すのか製品を主役にするのかなど切り口は多様で、課題は容易ではありません。学生たちの発想力と表現力に、今後ますます期待が高まります。





本学学生がCOPPA CENTRO GIAPPONE 2025 「戦後80周年記念事業フォーラム」に登壇、 「次世代燃料マーク」を提案

2025年10月13日（月・祝）、久屋大通公園・メディアヒロバで開催された「COPPA CENTRO GIAPPONE 2025 戦後80周年記念事業フォーラム」にて、カーデザインコースおよびインダストリアルデザインコースの学生が、「次世代燃料マーク」のアイデアスケッチを発表しました。

「COPPA CENTRO GIAPPONE 2025」は、戦後80年を迎える節

目に、平和の時代がもたらした自動車技術の進歩とモータースポーツの発展をテーマに開催されたイベントです。フォーラムでは、「クルマは世界を変えるー終戦100年に向けた新たな未来の始まりー」をテーマに、愛知県知事の大村秀章氏やカーグラフィック代表の加藤哲也氏らが登壇し、自動車と環境の未来について語りました。その中

で、本学のカーデザインコース・インダストリアルデザインコースの学生8名が壇上に立ち、サステナブルな燃料を象徴する新しいデザインを提案しました。

壇上に上がったのは、田口小次郎さん、森本芽生さん、巽涼平さん、山田宏晋さん、西田涼兵さん、加藤嵩太さん、松川紗苗さん、船戸茉莉呂さんの8名。巽さんは、「自動車を通して地

球環境を変えていくイメージを描きました。クルマのシルエットから葉が伸びる形で、未来へのつながりを表現しています。スーパーカーの写真を参考に、時代を超えても通じる新しいクルマの姿を意識しました」と語りました。山田さんは、「クラシックカーに貼るロゴデザインとして、ぱっと見てわかりやすく、主張しすぎない控えめで調和の取れたデザインを目指しました」と述べました。

カーデザインコースの田中昭彦教授は、「今回は提案段階ですが、来年に向けてさらにブラッシュアップを進める予定です。マグネットステッカーとして試作し、実際に配布する展開も検討しています」と今後の展望を述べました。

学生たちが描いた“次世代燃料マーク”は、クラシックカーと未来技術を結び、サステナブルな社会を象徴する新しいシンボルとなることを目指しています。



映像：第四管区海上保安本部より提供



名古屋芸術大学ウインドオーケストラ、 海上保安庁「第四管区総合訓練」で演奏

2025年11月23日（日）、名古屋芸術大学ウインドオーケストラは、海上保安庁が名古屋港で実施した「令和7年度 第四管区総合訓練」に参加し、巡視船みずほ船内で演奏を行いました。第四管区は、愛知県、三重県、岐阜県を管轄区域としその沿岸部から1,300kmの沖合いまでの海域を担任、海の警備・監

視、海難救助、密輸・密航対策など幅広い任務を担っています。当日は一般参加者が乗船し、放水、高速機動艇の展示走行、ヘリコプターとの連携救助など、海上保安業務の実際を間近に見ることができました。

名古屋芸術大学ウインドオーケストラは、訓練の進行に合わせて4回の演奏を実施し、巡視

船のヘリ格納庫に軽快なサウンドが響きました。

展示訓練後は巡視船みずほが名古屋港を出港し、新舞子、中部国際空港セントレア方面へと航走。演奏の合間には学生たちも甲板に出て、海側から眺める名古屋港の景色を楽しみ、この日ならではの特別な時間を味わいました。

さらに船内では海上保安庁による広報ブースが展開され、マスコットキャラクター「うみまる」くんも登場。参加者と写真を撮ったり展示を見たり、船内は終始和やかな雰囲気になりました。音楽と海、そして海上保安庁の活動がひとつに重なる心温まる交流の場となりました。

帰港直前の最後の演奏では、乗客が手拍子で応え、アンコールが起こりそうなほどの盛り上がりとなりました。

今回の参加を通じて、学生たちは海上保安庁の規律ある姿と凛とした雰囲気、そして乗船者への心配りに触れ、“海を守る仕事”を身近に感じる貴重な経験を得ました。演奏を通して地域社会に関わりながら、音楽が公共の場で果たす役割を体感する一日となりました。

北名古屋市 市制20周年記念 ロゴマーク・キャッチフレーズ 受賞作品が決定

北名古屋市は令和8年3月20日に市制施行20周年を迎えました。市では「共創のまちづくりの推進」「シビックプライドの醸成」「未来への飛躍」を基本方針に、多彩な記念事業を展開していく予定です。その一環として、市と包括連携協定を結ぶ本学美術領域・デザイン領域の学生を対象に、ロゴマーク・キャッチフレーズの募集が行われ、受賞作品が決定。2025年8月8日(金)、名古屋芸術大学アートスクエア3階「市民活動センター μ-base」にて発表会が行わ

れました。
グランプリに輝いたのは、デザイン領域ヴィジュアルデザインコース3年・松田真優子さんの「ゆめひろがる。このまちと。」。人と人との交流によって夢や希望が広がる様子を、人々が手をつないで輪をつくる姿で表現。中央の余白を北名古屋市の地形に見立て、地元らしさをデザインに取り込みました。
準グランプリは、ヴィジュアルデザインコース4年・鈴木麻桜さんの「愛ある街にこれからも」、佳作は、同コース4年・石



田陽子さんの「住みやすいまち。心を込めて。」が受賞。
太田孝則 北名古屋市長は「どの作品もハートやつながりを感じられる素晴らしい提案でした。今回のロゴマークとキャッチフレーズが、市民に愛されるまちづくりの象徴になることを願っ

ています。」と述べました。受賞作品は今後、ポスター、広報紙、SNSなどで広く活用されます。
ロゴマーク・キャッチフレーズは、20周年を盛り上げるために幅広く活用され、市民とともに祝う節目の年を彩ります。

2024年度(令和6年度) 名古屋芸大サポーターズクラブ活動状況

皆様からの温かいご声援を受け、2024年度の寄附金総額は、5,283,691円となりました。皆様の深いご理解とご協力に感謝し、厚く御礼申し上げます。

- 募集期間：2024年(令和6年)4月1日～2025年(令和7年)3月31日
- 寄附金総額：5,283,691円
- 寄附金の使途別状況[2025年(令和7年)3月31日現在]

1 一般寄附(名古屋芸大サポーターズクラブ募金)

寄附金の使途		寄附金額
1	学生に対する奨学金	20,000円
2	音楽活動支援事業	10,000円
3	制作活動支援事業	10,000円
4	芸術的素養習熟支援事業	0円
5	子ども教育活動支援事業	10,000円
6	名古屋芸大生キャリア支援事業	300,000円
7	グローバルな学生を育成するための学生企画の支援	0円
8	その他、学生支援の充実を図る事業	2,578,691円
合 計		2,928,691円

【寄附者について】

ご寄附いただいた方は、4名、15法人です。

○ご芳名(50音順、敬称略)

個人：高橋 哲司

法人：いちい信用金庫、株式会社ソシオ、株式会社フジ建装、株式会社舟橋植木、株式会社ワット、東海物産株式会社、東朋テクノロジー株式会社、名古屋芸術大学後援会、日本建設株式会社名古屋支店、富士工管株式会社

○ご芳名公表辞退

個人：3名／法人：5団体

2 名古屋芸術大学 楽団・合唱団 賛助会員 10,000円

3 名古屋芸術大学 クラウドファンディング

プロジェクト名	寄附金額
施設・里親家庭の子どもたちに夢と希望を!	221,000円
過去最高の「芸大祭」をあなたと	30,000円
吹奏楽部地域移行の受け皿に音楽大学で価値ある活動をしたい!	1,327,000円
サクソフォンのみのコンサートでホールを満席にしたい!	125,000円
合 計	1,703,000円

4 Giving Campaign2024 282,000円

5 名古屋自由学院寄付金

寄附金の使途	寄附金額
その他本学院の業務遂行に要する経費	360,000円
合 計	360,000円



表紙について

来住尚彦学長がプロデュースする「OSAKA INTERNATIONAL ART 2025」(左)、「Artists N.G.Y 2025」(右)。アートの“今と未来”を繋ぐ。



「名古屋芸大
グループ通信」
ウェブサイトを
発行

発行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報部
デザイン・協力：くまな工房一社
印刷：株クイックス
発行：2026年2月

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報部
〒481-8503
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話 0568-24-0318
FAX 0568-24-0369

